

続・優秀なる教師陣

旧旧山高は山口高等中学校の法令上の組織を変更したに止まるため、当初は教職員組織の変動はなかったが、以降の学事興張と生徒定員の増加にともなって教職員定員は22名から最高30名まで増加した。旧旧山高時代における校長は次のとおり。

- 初代 岡田良平(明治27年1月8日～同29年4月28日)
- 第2代 北條時敬(明治29年4月28日～同31年2月4日)
- 第3代 河内信朝(明治31年2月15日～同33年3月7日)
- 第4代 松本源太郎(明治33年3月7日～同38年3月31日)



第2代校長 北條時敬

ほうじょうときゆき

北條時敬と西田幾多郎

優秀なる人材を造るには、まず優秀なる教師が必要であるとの元山口高等中学校長・河内信朝の信条は、旧旧山高にも引き継がれ、真に学徳に秀でた人選が行われた。

第2代校長・数学者の北條時敬は金沢出身で、旧旧山高、第四高等学校、東京高等師範学校の各校長を歴任し、東北帝国大学総長、学習院院長を務めた人である。

北條が石川県専門学校で、当時学生だった西田幾多郎を教え、彼の才能を見込んで数学者になるよう強く勧めた。結局西田はこれを断り哲学者の道を選んだものの、親しい師弟関係は続き、西田を英語・独逸語教師として旧旧山高に招いたのも北條だった。西田は口数が少なく、何か宇宙の秘密でも見つけるような神秘的で眠そうな眼をしていたらしい。明治30年9月から約2年間在籍し、北條のいる第四高等学校へ転任し、後に京都帝国大学教授となった。代表的著作『善の研究』は、旧制高等学校生徒の必読書であった。



明治30年旧旧山高へ転任の際の西田幾多郎
(『若き西田幾多郎先生』より)

群を抜いた帝国大学進学率

旧旧山高の卒業生総数832人のうち、98%にあたる818人が帝国大学各分科大学に進学し、その実数は他府県の群を抜いて世に注目された。第3次伊藤内閣の文部大臣・外山正一は、『藩閥の将来』(明治32年刊行)と題する書を著し、その中で藩閥とか長閥とか言って攻撃しているが、むしろ山口県のように資金を投じて高等学校を設置すべきである、山口県からは大学に多数進学しており、卒業した学士たちが現に官・政・実業の各界に頭角を現している、と説いて学校熱をあおっている。